

防災研究所と連携して新しい教育・研究環境を創りたい

河田恵昭

定年の準備に2年は必要と考えて、既発表の論文整理とデータベース化や蔵書一覧の作成、不要な委員会議事録や資料、各種メモ類、原稿の下書きなどの廃棄をやってきた（もちろん自分ではできないので、人をお願いして）のであるが、やはり時間が足らなかった。それにははっきりした原因がある。政府や自治体の委員会は、京大を定年退官するということとはお構いなしに動いているから、退官した現在も相変わらず忙しいのである。たとえば、副座長を務める中央防災会議の大規模水害対策専門調査会では、2009年度中に提言をまとめる予定で、いま被害想定作業の真最中である。東京湾の高潮問題もしかりである。

このような相も変らぬ忙しさの中で定年を迎え、新しい職場である吹田の関西大学に行くようになった。花と緑に囲まれた美しい素晴らしいキャンパスである。かつて滞在したプリンストン大学やワシントン大学にもひけをとらない環境である。通勤時間が京大時代の約1/3になったこともあり、「大都市」の大学の恩恵をこうむっている。この1年は環境都市工学部の教授として居候であるが、この大学の旧土木工学科で平成3年からこの3月まで非常勤講師を務めていたおかげで、ほとんどの教官とは旧知であり、とても歓迎していただいている。週一度の「地球防災工学」の講義と教授会出席が主な仕事で、残りは来春開設予定の、社会安全学部と同大学院社会安全研究科修士課程の準備である。わが国で初の新しい学部・大学院では新任教授、准教授が26名採用されるが、21名は全国公募である。昨年7月から選考作業はスタートし、12月から面接をはじめて1月の下旬に錚々たる研究陣が揃った。最大22倍の難関であった。学際・異分野融合研究がこれのできる見通しがついた。学部、大学院のカリキュラムもほぼ決まり、5月に文部科学省に設置申請を出す運びになっている。施設整備費に240億円、当初5年間の維持費に120億円を投入する関西大学「2010年プロジェクト」は成功を約束されていることは間違いない。

開学が予定より1年遅れて2010年になったおかげで、私は人事からカリキュラム、必要な設備、部屋の機能・構成などの決定に関与してきた。予定通りなら、京大定年後落下傘で学部長に就任し、祭り上げられてなにもわからず、結局何もできない研究科長になっていた。1年の準備期間は、私にとって本当にありがたいと思っている。もちろん、関西大学でも平成17年度から最高審議機関である経営審議会に私を委員として委嘱し、昨年からは理事に就任して、経営と教学のいずれにも重用するという姿勢を内外に明確にさせていただいてきた。これから教授会規定やさまざまな内規作りが始まるが、要は防災研究所の諸規定のように、「研究を推進しやすい」ものを作りたいと考えている。

私見であるが、これからの私立大学はますます研究のウエートを高くせざるを得ないと思う。少子化の中で私立大学が生き延びるのは魅力あるテーマの学部を新設して大学の規模を大きくして経営の安定を図り、これと教育の質の向上につながる研究重視を重ねたシェナジー効果を期待するのが一番だろう。関西大学では、本年は約9万4千名の受験生を集め、西日本1であった。約3万人の学生中、1/3は女子学生であり、女性教員も多い。キャンパス全体が明るくて華やいだ雰囲気である。登校した学生は、キャンパスが居心地良いので夕方まで帰らない。したがって、講義の出席率も高く、かつてのような授業中の私語も目立たなくなった。教育環境の効果だと思う。関西大学の最初の戦略は「強い関西大学」を標榜して、まず大学の施設の重視、美しい環境整備の促進である。これは見事に成功した。これに比べると、京都大学の吉田地区もはるかに見劣りし、空き地や雑草が目立ち、建物内に人がまばらにしかいない桂キャンパスは何とかなないと、いずれ学部卒業生が大学院進学を希望せず、ほかの大学に行ってしまう危惧がある。

学部・大学院教育には、当然高度の研究成果が反映されていなければならない。ところが、私立大学はこれまで学部教育や就職活動を重視するあまり、レベルの高いほかの大学や研究機関で得られた一流の研究成果の紹介に努めたが、自前の研究体制は不十分のままである。また、ほとんどが個人研究のレベルでとどまっている。個人研究やまして共同研究を推進すれば、当然多額の経費が必要だから、大学の経費を学生の授業料に依存している現状では、研究費は二の次になるのである。ただし、研究室には卒業研究やゼミナールに属する3、4回生が配属されるから、「学生経費」と称する研究費は、京大に比べてはるかに多い。問題はこれを研究者が自分の研究のために使えない（もちろんこの経費は学生のためである）ことである。競争的外部資金を積極的に獲得する努力が不足していたといったらよいだろう。早稲田大学や慶応大学といっても、とくに優秀なのは学生であり（偏差値の高い受

験生が多数入学する当然の結果), 両校は学生の質の高さに支えられた一流校である。

いま, 研究環境が激変した。京都大学でも大型の研究計画は競争的外部資金がなければ推進不可能である。運営費交付金は日常の研究活動を支えるものであり, 科研費は個人研究中心の枠組みである。防災研究所でも COE 研究費が第二期の中期目標中期計画に採用されなければ, 年間 1 億円近くが交付されなくなるし, 首都直下地震のプロジェクトは本年を入れて 3 年で終わりである。必死になって研究費を獲得する努力を全所員を挙げてやらなければ, 一流を続けることが困難になってしまうだろう。

しかし, 私が在職中はそうではなかった。むしろ, 研究成果を反映した大学院教育を独自に推進できないことが悩みであって, これが解決できない限り, 京都大学は全国で一番充実している研究所・センターを有しているながら, この研究成果を教育に効果的に反映できないという欠点を払拭できない。フンボルト型を目指す大学院大学のアキレス腱が京大には存在する。それがこれである。ところが, 研究科本体はこれがわかっていない。たとえば, 理学研究科のように, 防災研究所に着任する新任の理学系教員の大学院教員の資格審査をやるところがまだあるなど, 信じられないような体質が残っている。このような防災研究所の教授会を軽視するような失礼なことを今も継続している。なぜ, そのような制度が今も残っているのか, なぜ変えようとししないのだろうか。防災研究所が理学研究科に申し入れて協議を始めるべきだろう。

この原稿を書いている 5 月には, 京都から大阪に向かう電車が JR 高槻駅に近づく車中から, 右手方向に 8 階建ての鉄骨構造まで立ちあがってきた関西大学高槻新キャンパスの本館が望見できる。2009 年末には 13 階建て, 延べ床面積 5.5 万平方メートル, 高さ 52m の本館が誕生する。宇治地区本館の約 1.5 倍の面積である。小学校から大学院まで同じ建物に入るといって, 世界初の試みがここで始まろうとしている。ここで, 26 名の教員を中心に共同研究に花を咲かせることができるかどうかポイントである。関西大学が近畿地方の関関同立体制から 1 頭抜きん出て, 早稲田大学や慶応大学に伍する存在になるには, すばらしい研究成果を, まずここから発信することが必須である。このやり方が王道である。この研究戦略を達成するために 10 年間を費やす態勢作りをすでに始めた。

防災研究所時代には, 大型の共同研究を推進する機会を何度も与えられた。100 人単位の共同研究推進のノウハウは持っているつもりである。当時の研究所の教員や研究活動を支える事務部の皆さまの協力があつたからこそ実現できたのである。防災研究所が新しいリーダーの下で共同研究を推進し, 後発の関西大学にもその機会を提供していただき, そして人事も含めて大学院教育と研究に参画・連携していただいて, これまでのように世界の Leading Institute であり続けられることを祈念しています。